

Title	対称関数の否定数限定回路計算量について(アルゴリズムと計算量理論)
Author(s)	田中, 圭介; 西野, 哲朗
Citation	数理解析研究所講究録 (1995), 906: 89-95
Issue Date	1995-04
URL	http://hdl.handle.net/2433/59457
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

対称関数の否定数限定回路計算量について

田中 圭介 (Keisuke Tanaka)

北陸先端科学技術大学院大学 情報科学研究科

tanaka@jaist.ac.jp

西野 哲朗 (Tetsuro Nishino)

電気通信大学 電子情報学科

nishino@sw.cas.uec.ac.jp

1 はじめに

Markov [3] は, すべての n 変数ブール関数を計算するには, $\lceil \log(n+1) \rceil$ 個の NOT ゲートが必要かつ十分であることを示した. Tanaka と Nishino は, 使用できる NOT ゲートを $\lceil \log(n+1) \rceil$ 個に制限した, n 変数を反転する組合せ回路の複雑さについて考察し [6], さらに, 使用できる NOT ゲートを $\lceil \log(n+1) \rceil - 1$ 個に制限した, parity 関数を計算する組合せ回路の複雑さについて考察した [7].

本稿では, 任意の対称関数 F に対して, 使用できる NOT ゲートを $\lceil \log(g+1) \rceil$ 個 (g は F の decrease) に制限した, F を計算する組合せ回路の複雑さについて考察する.

2 準備

NOT ゲートを高々 r 個含むような $\{\wedge, \vee, \neg\}$ -基底上の回路を r -circuit と呼ぶ. $C^r(f)$ ($D^r(f)$) で, ブール関数 f を計算する r -circuit の素子数の最小値 (r -circuit の深さの最小値) を表す. r が制限されているとき, r -circuit を 否定数限定回路 と呼び, $C^r(f)$ を f の 否定数限定回路計算量 と呼ぶ. 特に, 0-circuit を 単調回路 と呼び, $C^0(f)$ を f の 単調回路計算量 と呼ぶ. $C^0(f)$ を $C^m(f)$ と表記する. r が制限されていないとき, r -circuit を 組合せ回路 と呼び, $C^r(f)$ を f の 組合せ回路計算量 と呼ぶ. この場合, $C^r(f)$ を $C(f)$ と表記する.

$A = (a_1, \dots, a_n) \in \{0, 1\}^n$, $B = (b_1, \dots, b_n) \in \{0, 1\}^n$ とするとき, すべての $1 \leq i \leq n$ に対して $a_i \leq b_i$ ならば $A \leq B$ する. さらに, $A \leq B$ であり, かつ $a_i < b_i$ なる $1 \leq i \leq n$ が存在するならば $A < B$ とする. S を X_n の任意の部分集合とする. 部分割り当て π とは, $\pi: S \rightarrow \{0, 1\}$ なる形の関数のことをいう. 以下では, $|S|$ を $|\pi|$ で表し, 部分割り当て π によって n 変数ブール関数 f から導かれる $n - |\pi|$ 変数ブール関数を $f|^\pi$ で表すものとする.

n 個のブール変数の集合を $X_n = \{x_1, \dots, x_n\}$ で表し, $\#_1(X_n)$ で X_n に対する割り当て中の 1 の個数を表す. n 変数対称ブール関数 f を, spectrum と呼ばれる長さ $n+1$ の二進列 $s_0 \cdots s_n$ によって定義する. ただし, s_i は $\#_1(X_n) = i$ のときの $f(X_n)$ の値を表す. また, $\#_1(X_n) \geq k$ のとき, かつそのときに限り 1 を出力するような k -しきい値関数を $T_n^k(X_n)$ で表す.

3 主補題

本節では, 対称関数を計算する否定数限定回路中の NOT ゲートにおいて計算される関数に関する, 主補題 (補題 1) を示す.

$g(F_n) = (d_1, \dots, d_m)$ を以下のように定義する: $A_i \in \{0, 1\}^n$ ($0 \leq i \leq n$) かつ $A_0 < \cdots < A_n$ とする. $A_0 = (0, \dots, 0)$ であることに注意する. 任意の n 変数入力関数 f に対して, $g(f) = (d_1, \dots, d_m)$ と定義する. ただし, $\{d_1, \dots, d_m\} = \{d \mid 1 \leq d \leq n, f(A_{d-1}) \neq f(A_d)\}$ かつ $d_1 < \cdots < d_m$ であるとする. $|g(f)|$ を f の decrease とよぶ. F_n を,

$$g(F_n) = (d_1, \dots, d_m)$$

であるような X_n 上の任意の対称関数とする. 以下では, 記述を単純にするために, 一般性を失うことなく, $m = 2^r - 1$ ($r = 0, 1, \dots$) であるような F_n についてのみ考察する. このとき, $r = \log(m+1) = \lceil \log(|g(F_n)| + 1) \rceil$ であることに注意する. [3] より, F_n を計算するには r 個の NOT ゲートが必要かつ十分であることが知られている. F_n を計算する最適な r -circuit を \mathcal{F}_n で表す.

\mathcal{F}_n に含まれる r 個の NOT ゲートを N_1, \dots, N_r とし, その出力において計算される関数を, それぞれ y_1, \dots, y_r とする. また, N_1, \dots, N_r の入力において計算される関数を, それぞれ z_1, \dots, z_r とする. NOT ゲートは 1 入力 1 出力なので, すべての i , $1 \leq i \leq r$ に対して, $y_i = \neg z_i$ であることに注意する.

f を $f(A_0) = 0$ を満たす任意の対称関数とする. 以下では, f の spectrum を $s(f) = (r_1, \dots, r_k)$ と表す. ただし, $\{r_1, \dots, r_k\} = \{t \mid 1 \leq t \leq n, f(A_{t-1}) \neq f(A_t)\}$ かつ $r_1 < \cdots < r_k$ であるとする. f は, この表記法によって一意に表現できる.

補題 1 \mathcal{F}_n 内の r 個の NOT ゲート N_1, \dots, N_r から集合 $\{1, \dots, r\}$ への全単射 σ が存在して, $z_{\sigma(N_1)}, \dots, z_{\sigma(N_r)}$ は以下の条件を満足する: 各 i ($1 \leq i \leq r$) に対し, z_i のみが y_1, \dots, y_{i-1} の値と, AND ゲート, OR ゲートのみを用いた \mathcal{F}_n の部分回路によって計算される. さらに, z_i は X_n 上の対称関数であり, その spectrum は,

$$s(z_i) = (d_{\frac{(m+1)}{2^i}}, d_{\frac{2(m+1)}{2^i}}, d_{\frac{3(m+1)}{2^i}}, \dots, d_{\frac{(2^i-1)(m+1)}{2^i}})$$

である. \square

$\#_1(X_n)$ が k で割り切れるとき, かつそのときに限り 1 を出力するような modular 関数を $MOD_n^k(X_n)$ で表す. $n = k2^r - k$ とする. MOD_n^k は対称関数であり, $|g(MOD_n^k)| = n/k$ なの

で, 補題 1 を適用することにより, MOD_n^k を計算する最適な r_m -circuit \mathcal{M}_n に関して, 以下の系が得られる.

系 1 $r_m = \log(n/k + 1)$ とする. このとき, \mathcal{M}_n 内の r_m 個の *NOT* ゲート N_1, \dots, N_{r_m} から集合 $\{1, \dots, r_m\}$ への全単射 σ が存在して, $z_{\sigma(N_1)}, \dots, z_{\sigma(N_{r_m})}$ は以下の条件を満足する: 各 i ($1 \leq i \leq r_m$) に対し, z_i のみが y_1, \dots, y_{i-1} の値と, *AND* ゲート, *OR* ゲートのみを用いた \mathcal{M}_n の部分回路によって計算される. さらに, z_i は X_n 上の対称関数であり, その *spectrum* は,

$$s(z_i) = \left(\frac{n+k}{2^i} - k + 1, \frac{2(n+k)}{2^i} - k + 1, \frac{3(n+k)}{2^i} - k + 1, \dots, \frac{(2^i - 1)(n+k)}{2^i} - k + 1 \right)$$

である. \square

$\#_1(X_n)$ が奇数のとき, かつそのときに限り 1 を出力するような **parity 関数** を $PARITY_n(X_n)$ で表す. $n = 2^{r_p+1} - 1$ とする. $PARITY_n$ を計算する最適な r_p -circuit を \mathcal{P}_n で表す. $PARITY_n$ は対称関数であり, $|g(PARITY_n)| = (n-1)/2$ なので, $PARITY_n$ を計算する最適な r_p -circuit に関しても, 系 1 と同様な系が成り立つ. ただし, $r_p = \log((n-1)/2 + 1)$ とし, かつ,

$$s(z_i) = \left(\frac{n+1}{2^i}, \frac{2(n+1)}{2^i}, \frac{3(n+1)}{2^i}, \dots, \frac{(2^i - 1)(n+1)}{2^i} \right)$$

とする.

また, $PARITY_n$ の否定 (すなわち $\#_1(X_n)$ が偶数のとき, かつそのときに限り 1 を出力するような関数) を $\overline{PARITY}_n(X_n)$ で表す. $n = 2^{r_{\bar{p}}+1} - 2$ とする. \overline{PARITY}_n は対称関数であり, $|g(\overline{PARITY}_n)| = n/2$ なので, \overline{PARITY}_n を計算する最適な $r_{\bar{p}}$ -circuit に関しても, 系 1 と同様な系が成り立つ. ただし, $r_{\bar{p}} = \log(n/2 + 1)$ とし, かつ,

$$s(z_i) = \left(\frac{n+2}{2^i} - 1, \frac{2(n+2)}{2^i} - 1, \frac{3(n+2)}{2^i} - 1, \dots, \frac{(2^i - 1)(n+2)}{2^i} - 1 \right)$$

とする.

さらに, $G_n^k(X_n) = T_n^k(x_1, \dots, x_n) \oplus x_1 \oplus \dots \oplus x_n$, $n = 2^{r_g+1}$ とする. G_n^k は対称関数であり, $|g(G_n^k)| = n/k$ なので, G_n^k を計算する最適な r_g -circuit に関しても, 系 1 と同様な系が成り立つ.

4 対称関数の否定数限定回路計算量

\mathcal{M}_n のサイズおよび深さの上界に関しては, 以下の結果が知られている [2, 5, 6].

主張 1 1. $C^{r_m}(MOD_n^k) = O(n \log n)$.

2. $D^{r_m}(MOD_n^k) = O(\log n)$. \square

なお、主張 1 の二式中の O -notation に隠れている定数係数は、[1] の単調 sorting 回路に依存しているため、かなり大きい値である。

補題 1 を用いると、 \mathcal{M}_n のサイズおよび深さの下界に関して、以下の定理および系が得られる。

定理 1

$$C^{r_m}(\text{MOD}_n^k) \geq 4n + 3 \log(n+k) - 5k - c. \quad \square$$

F_n は $g(F_n) = (d_1, \dots, d_m)$ であるような X_n 上の任意の対称関数であり、また、 $r = \log(m+1)$ であったことに注意する。定理 1 の証明と同様な方法で、一般に、以下の結果が得られる。

定理 2

$$C^r(F_n) \geq C^m(T_n^{d(m+1)/2}) + 3 \log(m+1) - c. \quad \square$$

特に、parity 関数については、以下の結果が得られる。ここで、 $r_{\bar{p}} = \log(n+2) - 1$ 、 $r_m = \log(n+k) - k$ であったことに注意する。

系 2 1. $C^{r_p}(\text{PARITY}_n) \geq 4n + 3 \log(n+1) - c.$

2. $C^{r_{\bar{p}}}(\overline{\text{PARITY}}_n) \geq 4n + 3 \log(n+2) - c. \quad \square$

一方、対称関数を計算する否定数限定回路の深さについては、以下の結果が得られる。

定理 3

$$D^{r_m}(\text{MOD}_n^k) \geq 4 \log(n+k) - k - c. \quad \square$$

定理 4

$$D^r(F_n) \geq D^m(T_n^{d(m+1)/2}) + 3 \log(m+1) - c. \quad \square$$

系 3 1. $D^{r_p}(\text{PARITY}_n) \geq 4 \log(n+1) - c.$

2. $D^{r_{\bar{p}}}(\overline{\text{PARITY}}_n) \geq 4 \log(n+2) - c. \quad \square$

次に、 \mathcal{M}_n のサイズが超線形下界をもつような場合を紹介する。そのために、以下のような制約を考える。

制約 A: \mathcal{M}_n 内において、 N_1, \dots, N_l のいずれかからの path が存在するようなゲートの出力では、必ず対称関数が計算されている。

定理 5 制約 A を満たす \mathcal{M}_n のサイズは $\Omega(((n-k)\log(n-k))/k)$ である. \square

$r = \log(m+1)$ であり, かつ, \mathcal{F}_n は F_n を計算する最適な r -circuit であったことに注意する. また, $A_i \in \{0, 1\}^n$ ($0 \leq i \leq n$) かつ $A_0 < \dots < A_n$ であった.

定理 6 制約 A を満たす \mathcal{F}_n のサイズは, $C^m(T_n^{q_1}, T_n^{q_2}, \dots, T_n^{q_k})$ 以上である. ただし, $\{q_1, \dots, q_k\} = \{q \mid 1 \leq q \leq n, F(A_{q-1}) \neq F(A_q)\}$ とする. \square

5 否定数と回路サイズの関係について

本節では, NOT ゲートの個数と回路サイズの関係について考察する. Tardos [8] は, 単調回路の複雑さが $2^{\Omega(n^{1/6-o(1)})}$ であるような, 多項式時間計算可能な単調関数 f_n の存在を示した. すなわち, 次の命題が成り立つ [4].

主張 2 以下の条件を満たす t ($0 \leq t \leq \lceil \log(n+1) \rceil - 1$) が存在する:

$$\frac{C^t(f_n)}{C^{t+1}(f_n)} = \exp(\Omega(n^{1/6-o(1)})). \quad \square$$

$n = 2^{r_h+2} - 1$, $m = (n-1)/2$ とする. $r_h = \log(n+1) - 2$ であることに注意する. ここで, 次のような n 変数関数 h_n を考える:

$$h_n(x_1, \dots, x_{m+2}, w_1, \dots, w_{m-1}) = f_{m+2}(x_1, \dots, x_{m+2}) \oplus w_1 \oplus \dots \oplus w_{m-1}.$$

以下の主張は [6] より自明である.

主張 3

$$C^{r_h+2}(h_n) \leq 2C(h_n) + O(n(\log n)^2). \quad \square$$

$C(h_n)$ は, 明らかに n の多項式で上から押えられる. h_n を計算する最適な r_h -circuit を \mathcal{H}_n で表す. 補題 1 と同様の議論により, 以下の補題が得られる.

補題 2 \mathcal{H}_n 内の r_h 個の NOT ゲート N_1, \dots, N_{r_h} から集合 $\{1, \dots, r_h\}$ への全単射 σ が存在して, $z_{\sigma(N_1)}, \dots, z_{\sigma(N_{r_h})}$ は以下の条件を満足する: 各 i ($1 \leq i \leq r_h$) に対し, z_i のみが y_1, \dots, y_{i-1} の値と, AND ゲート, OR ゲートのみを用いた \mathcal{H}_n の部分回路によって計算される. さらに, z_i は $\{f_{m+2}(x_1, \dots, x_{m+2}), w_1, \dots, w_{m-1}\}$ 上の対称関数であり, その spectrum は,

$$s(z_i) = \left(\frac{m+1}{2^i}, \frac{2(m+1)}{2^i}, \frac{3(m+1)}{2^i}, \dots, \frac{(2^i-1)(m+1)}{2^i} \right)$$

である.

証明. 各 x_i ($1 \leq i \leq m+2$) は, すべての w_j ($1 \leq j \leq m-1$) と独立なので, 関数値 $f_{m+2}(x_1, \dots, x_{m+2})$ は, すべての w_j ($1 \leq j \leq m-1$) と独立な変数 w_m とみなすことができる. このとき, $h_n(w_1, \dots, w_{m-1}, w_m) = \text{PARITY}_m(w_1, \dots, w_{m-1}, w_m)$, $m = 2^{r_h+1} - 1$ であり, \mathcal{H}_n は r_h 個の NOT ゲートを含む. よって, 系 1 を \mathcal{H}_n に適用することにより, 補題 2 が証明できる. \square

主張 4

$$C^{r_h}(h_n) = \exp(\Omega(n^{1/6-o(1)})).$$

証明. \mathcal{H}_n 内には N_1, \dots, N_{r_h} 以外の NOT ゲートが存在しないので, $f_{m+2}(x_1, \dots, x_{m+2})$ は単調部分回路で計算されなくてはならない. よって 補題 2 より, z_1 を計算する部分回路のサイズは, 少なくとも $C^m(z_1(f_{m+2}(x_1, \dots, x_{m+2}), w_1, \dots, w_{m-1}))$ である.

w_1, \dots, w_{m-1} のうちの $(m-1)/2$ 個の変数を 1 に固定し, 残りの変数を 0 に固定する部分割り当てを π とする. このとき, [8] より,

$$\begin{aligned} C^m(z_1(f_{m+2}(x_1, \dots, x_{m+2}), w_1, \dots, w_{m-1})) &\geq C^m(z_1^\pi(f_{m+2}(x_1, \dots, x_{m+2}), w_1, \dots, w_{m-1})) \\ &= C^m(T_m^{(m+1)/2|\pi}(f_{m+2}(x_1, \dots, x_{m+2}), w_1, \dots, w_{m-1})) \\ &= C^m(f_{m+2}(x_1, \dots, x_{m+2})) \\ &= 2^{\Omega(m^{1/6-o(1)})} \\ &= 2^{\Omega(n^{1/6-o(1)})}. \quad \square \end{aligned}$$

最後に, 主張 3 と 4 より, 以下の定理を得る.

定理 7 $t = \log(n+1) - 2$, または $t = \log(n+1) - 1$ のどちらかのときに以下が成り立つ.

$$\frac{C^t(h_n)}{C^{t+1}(h_n)} = \exp(\Omega(n^{1/6-o(1)})). \quad \square$$

参考文献

- [1] AJTAI, M., KOMLÓS, J., AND SZEMERÉDI, E. An $O(n \log n)$ sorting network. In *Proceedings of the 15th Annual ACM Symposium on the Theory of Computing* (1983), pp. 1–9.
- [2] FISCHER, M. J. The complexity of negation-limited networks—a brief survey. In *Lecture Notes in Computer Science 33*. Springer-Verlag, Berlin, 1974, pp. 71–82.

- [3] MARKOV, A. A. On the inversion complexity of a system of functions. *J. ACM* 5 (1958), 331–334.
- [4] NISHINO, T., AND TANAKA, K. On the negation-limited circuit complexity of clique functions. To appear in *IEICE Trans. on Information and Systems*, Dec. 1993.
- [5] SANTHA, M., AND WILSON, C. Limiting negations in constant depth circuits. *SIAM J. Comput.* 22, 2 (Apr. 1993), 294–302.
- [6] TANAKA, K., AND NISHINO, T. On the complexity of negation-limited Boolean networks. In *Proceedings of the 26th Annual ACM Symposium on the Theory of Computing* (May 1994), pp. 38–47.
- [7] 田中 圭介, 西野 哲朗, Parity 関数を計算する否定数限定回路の複雑さについて, 夏の LA シンポジウム, 蓼科, 1994 年 7 月 (「情報基礎理論ワークショップ論文集」に掲載予定).
- [8] TARDOS, É. The gap between monotone and non-monotone circuit complexity is exponential. *Combinatorica* 7, 4 (1987), 141–142.